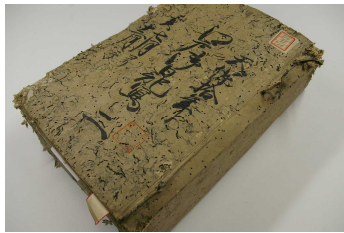


紙資料の修復①

リーフキャストイングによる修復

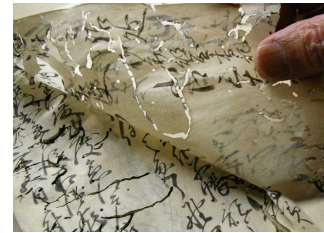
リーフキャストイングとは、紙漉きの原理で欠損部に紙繊維を充てんする修復技法である。損傷した資料を水に浮かべ、そこへ水に溶かした紙繊維を流し込み吸水する。その過程で紙繊維が欠損部分に入り、脱水・乾燥すると欠損部分が紙で充てんされるわけである。紙繊維は欠損部分のみに残るので、①修復後の資料の厚みがほとんど変わらない、②欠損部分が複雑な場合（大量の虫食い穴等）も一度に修復できる、③両面に情報がある紙の裏面を隠すことなく修復できる、という利点がある。リーフキャストイングの機械は、吸水方法によって「吸引式」「水頭圧式」に分けられる。ここで紹介するのは「水頭圧式」機械による修復である。



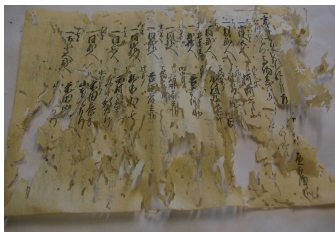
① 損傷状態などを記録、撮影する。



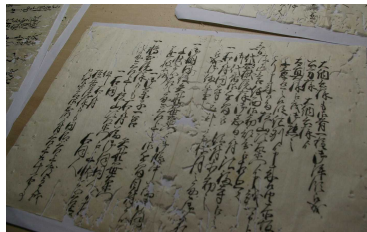
② 虫食いによる固着が見られる。



③ 修理のため一枚ずつはがす。



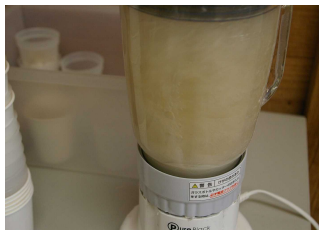
④ 折丁（おりちょう）を広げる。



⑤ 本紙からはずれた紙を固定して折れや歪みを整える。



⑥ リーフキャストイング機の水槽に並べる。



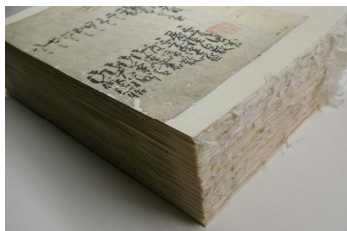
⑦ 国産の良質な楮繊維を配合し水に溶かす。



⑧ 楮繊維の入った水を吸引しながら、虫穴に繊維を充てんする。



⑨ プレス機にはさみ脱水、乾燥。



⑩ 元通りに二つ折りにし帳面に仕立てる。



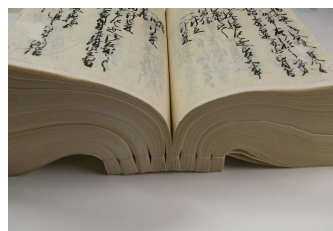
⑪ こよりを使って下綴じを施す。



⑫ 針を同時に4本使ってくさり綴じにする。



⑬ 修復後の状態。



⑭ くさり綴じにしたことで、修復前より開きやすくなった。

資料：『江戸御日記写 二』
（天保10（1839）年、
鳥取県立博物館所蔵）
画像提供：秦博志氏
（修復工房 HATA Studio）

紙資料の修復②

書籍の修復

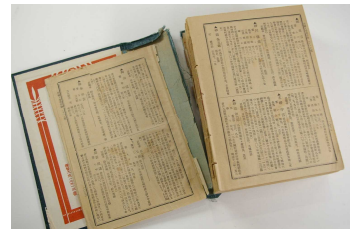
書籍には大きく分けて和装本と洋装本がある。洋装本は明治期に欧米からその製本方法が輸入された。以後、日本では伝統的な和装本に加えて洋装本、さらに両者を折衷した製本も見られた。明治以前の和装本が、基本的には和紙と糸のみで製本されているのに対して、洋装本は、皮革や布、芯紙、糊などを使って製本されている。また、紙の種類や綴じ方も多様である。洋装本の劣化には、こうした素材の経年劣化や綴じ方などが複雑に影響する。表紙素材の劣化については、ここで紹介する事例のほかに、革装丁の劣化「レッド・ロット」（装丁に使われた革が赤茶色に変色し、強度を失って粉状に崩れる）等が見られる。また、本自体の劣化については、酸性紙の劣化が大きな問題となっている。



①背表紙が剥落し、製本クロスに包まれた背芯紙が見えている。



②表紙と本をつなぐ「見返し」は、ほとんどちぎれかけている。



③巻末はページごと脱落している。



④表紙のクロスを修復するため、見返し、ボール紙、背芯紙を外す。



⑤背表紙のクロスから背芯紙を外す。



⑥表紙クロスを広げると、布の剥離や欠損が見られる。



⑦新しい製本クロスで裏打ちし、表紙の芯材としてボール紙を巻く。



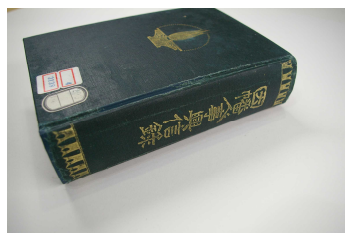
⑧表紙から剥がした「見返し」は、リーフキャストで修復する。



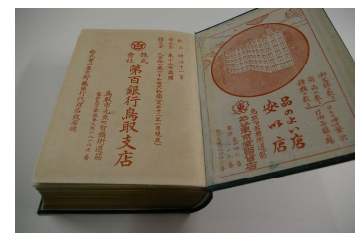
⑨修復した「見返し」を本に戻し、綴じを補強。「花布」を付ける。



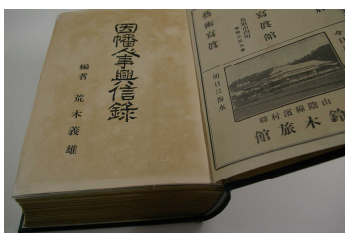
⑩表紙と本を糊付けする。小型プレス機に挟んで固定する。



⑪修復作業が完了した。



⑫「見返し」が表紙に戻された。



⑬「見返し」と本のつなぎ目も元通りになった。



⑭本の綴じなおしと補強により、ページが開きやすくなった。

資料：『因幡人事興信録』
（大正 12（1923）年、
当館所蔵）
画像提供：秦博志氏
（修復工房 HATA Studio）